

病気はなぜ、あるのか

ランドルフ・M・ネシー、ジョージ・C・ウィリアムズ著

この本はかなり変わった本である。

「どのようにして病気になるか」を述べた本はたくさんある。「どのようにしたら病気にならないか」を説いた本もたくさんある。けれどこの本は「進化医学」という聞きなれない立場から、ずばりこの本質的な問題に取り組んだ、まさに目からウロコの本である。

「進化」といわれると、病気なんて余計なもののように思われる。自然淘汰は病気などをどんどん切り捨てて、「種」を健全に保とうとしてきたはずではないのか？

病気はなぜ、あるのか



く説く本質の進化で立場の医学

けれどそれは、例の社会ダーウィニ

ズムという誤解である。現代の進化学によれば、自然淘汰は種の健全化とか改良などは「目指して」いない。自然淘汰は、種ではなく、一匹一匹の「個体」がなるべくちゃんと生きて、自分の子孫をなるべくたくさん後代に残せるように働いているのである。種の存続はその「結果」にすぎない。

ある病原体に侵入されると、体は体温を上げて対抗する。それが病気のときの発熱である。ちゃんと発熱できた個体は病原体との闘いに勝ち、生き残ってそのような子孫を残すだろう。妊娠初期のつわりは病気ではないが、それはもともと敏感な時期の胎児に有害なものが入りこまないようにして、ちゃんと子孫が残っていくために進化したしくみと考えられる。

残念ながら、自然淘汰は個体のこと

Randolph M. Nesse
Sehligan 大医学部精神医学
部教授 George C. Williams
New York 州立
大名誉教授

ではなく、子孫つまり遺伝子が残ることしか「考えて」いない。セックスが気持ちいいのも、それによって子孫が残りやすくなるからであって、個体に快を味わわせるためではない。ちゃんと生き、子孫を残すのに有利なくみが、個体に不快や苦痛をもたらす場合もある。それが病気である。精神障害とされるものにもそれが言える。ある面で見ることが他の面では不快を生むこともある。たとえば老化がそれである。

とにかく詳しくはやはり本書を手にとって読んでいただきたい。高血圧の原因は何々のとり過ぎである、というような単純な話ではないのだから。長谷川眞理子、長谷川寿一、青木千里訳
(新曜社・四、二〇〇円)

総合地球環境学研究所長

日高 敏隆